

富野淇園（とみのきえん）（1/2）

～唐津神祭を描いた人～

富野淇園は天保元年（1830年）に唐津本町の御使者宿に生まれました。御使者宿では、唐津藩へ願い事をする町や村の人々のために、その書類を作ったり、代わって願い事をしたりする仕事をしていました。明治になって唐津藩が廃止され、その仕事もなくなり淇園は塾を開いて学問や絵を教えていました。

明治16年（1883年）塾生であった魚屋町西ノ木屋の山内小兵衛の頼みで「唐津神祭行列図」を描きました。7枚の大きなふすまに西ノ浜御旅所（注1）から西の門にかけて15台（注2）の曳山と曳子たち、大名行列、獅子舞、奉納相撲（注3）など、その見物の侍、町人、祭を楽しむ親子連れの姿など、多くの人々が画面いっぱい描かれています。

（注1）神社の祭りの時おみこしが一時留まる神地

（注2）紺屋町の黒獅子がこの図には描かれている。

（注3）神様の心を慰めるために行う相撲

この唐津神社の祭りは唐津の町ができる前は、唐津神社のあった神田村で獅子舞が行われていました。町田、菜畑、ニ夕子など唐津の村々でも獅子舞祭が行われ、淇園の行列図にも描かれています。また曳山に獅子頭が作られたように町祭りは村祭りと深い関係がありました。

かつて日本ではどの村や町でも、1年の行事として、その年の収穫を祈る春祭り、夏は伝染病にかからないよう水かけの祭り、秋は収穫を喜び神に感謝する祭りと、3つの祭りを行いました。

唐津くんちは秋の収穫を神に感謝して、その神が海へ帰る西の浜まで行列をして見送ったのでした。同時に町人は、その年に買い物に来てくれた人々へ感謝し、農民にとっては田植えや稲刈りの手伝いに来てくれた人々に感謝する祭りでもありました。そのために人々を招いてご馳走をしたのです。今は祭りの目的が曳山を引くことや曳子中心の祭りのように考えている人もいますが、神や人々への感謝をするものでした。

江戸時代には各地で城下町が発達し、町人たちもその豊かなお金の力で、山笠や曳山を造り盛大に祭りをしてその力を示しました。唐津の曳山も、その1つと考えられます。

～2/2へつづく～

分野 人物

地域 唐津

◎地図・写真・統計資料など



山内小兵衛の魚屋町西ノ木屋

（『郷土につくした人々』より）

◎引用・参考文献（出典）

◆『郷土につくした人々』
～ふるさと唐津の偉人たち～

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html

富野淇園（とみのきえん）（2/2）

～唐津神祭を描いた人～

～1/2からつづく～

しかし、淇園の行列図は曳山だけでなく、獅子舞、大名行列、奉納相撲とさまざまな催しも行われ、人々を楽しませた祭りのようすが描かれています。この絵は江戸時代の末から明治の初めまでの唐津神祭を1つ絵の中に描いています。

男たちはみな「ちょんまげ」、武士や各曳山を指揮する町人たちも刀を差している姿は江戸時代のものであり、大名行列の道具は明治になると相知の熊野神社に渡されたので、これもまた江戸時代のものでした。しかし上杉謙信の兜など5つの町の曳山は明治になって作られたものです。また曳子達は、今と違って上半身を裸にしている姿はなく、この曳山のしくみが町を守る火消組から始まり火消のきまりを大切にしていた歴史も知ることができます。いまも、曳子の装束は「火消組の装束」です。さらに浜辺に町ごとに幕を張って神と人と共に食事をするという日本の祭りの姿も描かれています。

淇園は、明治20年（1887年）に亡くなり、お墓は十人町の法蓮寺ほうれんじにあります。明治41年、墓のそばに塾生山内小兵衛ふるたちしやうえもん、古館正右衛門らが彰徳碑を建てました。

淇園の「唐津神祭行列図」は、唐津の大切な文化財であり、唐津の祭りのさまざまな歴史を、この絵1つで知ることばかりでなく、江戸から明治にかけての日本の祭り文化を伝えているのです。



唐津神祭行列図

（『郷土につくした人々』より）

分野 人物

地域 唐津

◎地図・写真・統計資料など



西ノ浜ご旅行所の奉納相撲
（唐津神祭行列図より）

（『郷土につくした人々』より）

◎引用・参考文献（出典）

◆『郷土につくした人々』
～ふるさと唐津の偉人たち～

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html